

## 料理を総合芸術にした北大路魯山人

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

「日本のレオナルド・ダビンチ」というと少し、大げさに過ぎるかもしれない。

しかし、単なる陶芸、書家、画家、美術評論、美食家のワクを超えて、食の空間全体を美の極地、総合的な雅美の世界にまで高めて新しいジャンルを切り開いた点では日本はもちろん世界的にも例のない芸術家である。



魯山人は 1883(明治 16)年 3 月、京都・上賀茂神社の社家の二男として生まれた。

本名は房次郎、生後すぐ農家に養子に出された。「生みの母から1滴の乳も飲ましてもらえず、他家へ出されたんや」と本人は回顧するが、捨て子同然で、極貧の養家を転々としながら食べるものもない悲惨な少年時代を過ごした。

1889(明治 22)年に木版職人に拾われ木版やペンキ看板書などしながら、篆刻、書を独学する、19 歳で、朝鮮総督府に勤めて、朝鮮古美術の造詣を深めた。

21 歳で上京、書や木彫、看板書きで腕前を上げて 1 人前になった。貧苦と飢餓の経験から「うまいものを食べたい」「料理は芸術なり」が強烈な原動力となり、書画骨董、古美術商のかたわらから、高級料亭の食客をしながら修行した。

1921(大正 10)年、38 歳で会員制の割烹「美食倶楽部」を始めた。これを発展させ、大正 14 年には、東京赤坂山王の日枝神社内にあった純和風数寄屋『星岡茶寮』を借りて本格的な会員制の高級料亭を開店した。

かつてここは公卿や大名、貴族たちの社交場だったところで、魯山人は料理を最高の美、芸術にする実験に食材は取り組んだ。

新鮮、珍味、美味なる食材を独自の日本料理にアレンジして茶碗、皿、器なども古九谷風、黄色瀬戸、備前焼の美しい食器に盛り付ける、食卓は紫檀の逸品で、色とりどりの季節の花を活けて書画、骨董などの古美術を飾って客の目を楽しませる。



部屋のデザイン、服装、客へのサービスにも、趣向をこらして奇抜な演出を行なった。

政治家、財界人、文化人ら約千人が会員となって大繁盛し、当時の日本を代表する高級サロン、社交場となった。



魯山人はここで使う一切の食器を作るために「星岡窯」を築いて、陶芸活動に熱中した。

この陶房に九谷や京都などの各窯の職人を雇い、下仕事をさせるたが、その中にのちの文化勲章授賞の荒川豊蔵もいた。

魯山人のすごさは芸術ジャンルの広さと質の高さ、圧

倒的なその作品量である。

美濃、備前、信楽、染付、赤絵など伝統にのっとった創造性豊かで、多彩な食器類の陶芸は約 20 万点、書、篆刻、絵画などの作品は 1 万点を越える。

ピカソの約20倍という制作点数は世界の芸術家でも多分、トップであろう。

生前の魯山人ほど毀誉褒貶合い半ば以上に、悪評さくさくの芸術家はいない。

妻をかえること七度、子供をませた女性は三〇人にのぼる。天才肌で、自己の才能には強烈な自信を持っており、ある陶芸展の会場で、居並ぶ作家を前に『俺以外のお前たちの作品は駄作ばかりだ』と大声で酷評した。

その性格は傲岸無礼、偏屈不遜で、蛇蝎のごとく知らわれた。

弟子たちを絶えず怒鳴りつけ、友人とも仲たがいし、弟子も離れていった。

戦後、アメリカ、ヨーロッパで魯山人のそのスケールの大きい豪華な陶芸作品がブームとなった。昭和二十八年、米国、ヨーロッパを旅行して、フランス・ニースでピカソのアトリエを訪問した。

帰国後、「ピカソは絵が下手で美がない。思想の文字を絵に描いただけ」「ピカソなんて、ゴッロツキの親分みたいな奴さ、俺のほうがよっぽど大芸術家だ」と放言した。

人間国宝の要請を2度にわたりきっぱり断った魯山人は1959年(昭和三十四)十二月、肝硬変で76歳の生涯を終えた。

それから半世紀、悪評は沈殿し、その華麗な作品群はますます光芒を放ち世界中にファンを増やしている。